

光緒卅三年の北京における娼妓義務戯の研究

吉川良和

はしがき

光緒卅三年(一九〇七)は中国近代演劇史で特筆すべき年である。だが、この事に言及した論著は寡聞にしてきかない。その原因は、民国初期において「坤劇」が北京の舞台を席捲したことを過小評価しているからだろう。「坤」は男性の「乾」の対称で、坤劇とは女優劇のことであり、この頃、女優は「坤伶」、「坤角」といわれた)。おそらく、当時の坤劇に対する認識がまだ不十分なために、そうした研究には至らないのではないかと思われる。筆者は一九八〇年に『民国初期の北京における坤劇の研究』を発表した⁽¹⁾。その目的は、今日ではほとんど知られていない坤劇が、民国初期に破天荒な人気を博して北京の主要舞台を占領した

だけでなく、大きな社会的役割を果たしたその上に、後世の演劇に少なからぬ影響を与えた実情を闡明せんとするところにあった。

清宮の庇護を受けていた清代後期の京劇は北京で絶大な勢力をもっていた。そして、民国以後は富連成科班を代表とする育成所出身者と梅蘭芳を中心とする改革が功を奏して大いに発展したために、多くの論者はこうした富連成や梅蘭芳の成就に目が集中し、今日にいたるまで、京劇がまるで京劇それ自身で改革が実現し発展してきたように述べている。しかしながら、それは予め京劇が最高の伝統演劇で、それに携わった梅蘭芳をはじめとする、いわゆる名優だけが歴史の表舞台で脚光を浴びているようであり、それが可能になった重要な先行要素をまったく無視した論調に

終始しているように思われるのである。

筆者は北京の坤劇が民国初期においていかに重要であったかを再度論ずるつもりであるが、それは紙幅をかなり要するので別稿にゆずりたい。そこで、小論では、まず以前の上掲論文では言及できなかった清朝晩期の女性の有志が、その当時禁令によって許されなかった女性の演劇活動を、熱意と、意志と、暖かい善意とによって、いかに打破したか、その経緯をいささか克明に探求して明らかにしたいと思う。なぜならば、これを闡明しなければ、清末に奮闘努力した数人の奇特な娼妓であった彼女たちの芳名は、歴史の海の藻屑となって埋没してしまうからであり、あまつさえ、民国初期の輝かしい坤劇の活躍や意義すらも、今日では否定的な徒花と評価されがちだからである。筆者はそれを肯定的に評価するがゆえに、北京における近代坤劇の嚆矢となった初演実施に漕ぎつける紆余曲折を小論で闡明しておきたい。清末の伝統演劇改革は演劇の諸方面におよぶが、役者達がただ手を拱いて与えられたものではなかった。それは、その当時、苛酷な差別を受けていた役者(坤伶も含み)たちの中の先進的な人士の並々ならぬ努力、そして、さらに男女双方から蔑まれていた娼妓たちの自覚と奮闘な

しでは実現しなかったのである。

一 晩清に北京における伝統演劇に関する禁令

晩清の北京では、「夜劇」「堂客」「坤劇」の三件が禁止されていた。それは、北京当時の新聞に「北京は中国中央政府の所在、政治集権の地である」という特殊な地域であったからだ。当時、上海や天津では、これらの禁令はずでに緩和されていた。なぜなら、上海や天津では一流の劇場が多く列強の租界地にあり、中国官憲の権力が及ばなかったこともあるが、なによりも天子のお膝元で、少数の満州人が多数の漢人を統治するという治安の維持と、旗人が遊興に現をぬかすことを極度に恐れていたからであろう。当時の北京では女性客「堂客」(男性客は「官客」と女優「坤伶」を締め出していて、北京の劇場は男だけの特殊な世界を形成していたから、「夜劇」をやらせると夜間男どもが千人近くも一箇所に集まり大変な事態を招くであろうと懸念したのである。

例えば、光緒卅年(一九〇四)十二月十一日の『順天時報』〈京師新聞〉に「禁止代灯演戲」とある。ここにも、「各売女座、嚴行禁止(筆者註・女性客嚴禁)」とあり、ま

たマチネーしかなかった北京の劇場では、冬早く日が暮るので、女優の出る終りの頃には舞台で松明を持たせていたが、当局はできるだけ早く芝居を終わらせて、松明を使用しないようにと指導している。これは、火災を心配していると同時に、芝居が夜におよぶのを恐れていたのである。卅一年(一九〇五)二月十九日同紙同欄に「不准演夜劇(筆者註：夜劇不認可)」とある。旧暦一月十五日(元宵節)は新年最初の満月の日でしかも各家提灯を掲げたので、中国では昔からこの日だけは夜歩きできた。そこで、夜劇の許可を申し入れたが、当局は「京師之地、非津滬可比(筆者註：京師は天津や上海とちがう)」、まして元宵の夜は人ごみで密集し、不測の事態が起こりかねないと批駁しているのである。ところが、伝統演劇の夜劇は禁止されていたが、新しく入ってきた映画館は、夜の公演と女性客の入場が許可されていた。⁽³⁾それに、当時の上海の劇場を描いた図像には、堂客も観劇しているのが見えるし、夜も上演していた。つまり、北京は時代から置き去りにされていたのである。

女優の出演に関しては、北京の劇場側も当局に強く請願すら出していない。それが、南方では坤劇を「毛(猫)児

戯」と呼んで、光緒の初年から公演しており、上海では、群芳茶園、張園などすでに常打小屋もあった。⁽⁵⁾当時、坤伶が社会から蔑視され問題視されていたのは、天津などで坤劇が流行するにつけ、幼女を勾引して売り飛ばすといった風潮が現れたことと、なにより彼女達が売笑をしていたからである。⁽⁶⁾こうした事情があって、坤劇は天津だけ男女共演が許可されていたが、それでも度々禁令を申し出るものがあり、上海は男女共演禁止、北京では坤劇全面禁止であった。

こうした禁令に対する打破は、前述のとおり、役者たちが手を拱いて実現したわけではない。それには、「義務戯」に積極的に参与し、諸禁令を突破しようとした意志が働いていた。それ故、義務戯の果たした役割は非常に大きなものであった。中国では伝統演劇のことを「戯」といい、「義務戯」というのは、慈善公演のことをいう。近代伝統演劇界における義務戯の嚆矢は田際雲自作の演劇である。それは、光緒卅二年(一九〇六)、旧暦二月に初演された。⁽⁷⁾当時著名な河北地方の伝統演劇「河北梆子」の名おやまであった田際雲は北京における近代伝統演劇界改革のリーダー的存在で、彼は天津や北京の篤志家と協力して熱心に

社会活動をやり、演劇を通して被差別民であった役者の社会参加と自覚を促した尊崇さるべき人物であった。すなわち、当時演劇は社会教育の一環として認識されており、その実演者である役者も社会公益に寄与することで、自らの身分を格上げしようとしたのである。彼自作自演の『惠興女士伝』は、惠興という女士が杭州の貞文女学校を設立したが経済的に維持できず資金援助を頼んだところ、当局に受け入れられなかったために憤慨し自害して抗議した惠興事件を舞台で再見してやり、その上演収入を学校経営の資金にしたのである。⁽⁸⁾この時、「義務戲」という特殊な事柄であるからと、特例で「夜劇」と「堂客」が許された。かくて、義務戲は北京の堅固な禁令に対して、徐々に風穴を開けていったのである。

二 北京近代坤劇実現に向かう経緯

翌光緒卅三年（一九〇七年）春、前年江南の江蘇・安徽で発生した水害被災者に対する義務戲が発案された。慈善篤志家であった喬蓋臣、王子貞らと、田際雲が「普仁戲会」を創設し、この年の三月八日、九日に北京前門外の東に走る打磨廠通りの福寿堂で行った。先に被災状況と義損

金呼掛けの演説があり、その後アコーデオンの演奏があった、七時から芝居が始まったという。⁽⁹⁾しかし、この時の収益は十分でなかったと見えて、さらに田際雲は喬蓋臣らと協力して、今度は大御所の譚鑫培や当時名優であったのもかかわらず出演の少なかった汪桂芬などといった大物を出し女性客も入れて、さらに義捐金を募ったのである。⁽¹⁰⁾

三月二十九日から四月二日までの五日間であった。

慈善事業の盛んだった天津では、北京より一足先に被災者援助の「娼妓義務戲」が行われている。⁽¹¹⁾「特邀名角（筆者註：特に名優を招く）」とあって男女が共演をしていたかも知れない。なぜなら、当時、天津の商業劇場では女優劇は当然のこと、卑猥な演出が多出しているとして男女分演が主張されていたが、上海でも禁止されていた男女共演（男女配演）が常態となっていたからである（この頃は、「男女台演」と称されたが、これには「男女が相手役を勤めて共演する」「配演」と、舞台上では共演しないが楽屋を共にするケースがあって、当時の天津は舞台上で「配演」し男優の相手役をやっていたのである）。三月二十五日に、「花界（娼家）慈善会」が英斂之、劉子良らと協力して、昼夜慈善公演をしている。だから、北京より早かったけれ

ども、天津には坤劇がすでにあり坤伶が活躍し、北京では民国になっても禁止されていた「男女配演」まで許されていたのだから、北京ほどのインパクトはなかったのである。天津にはすでに坤伶がいたのに、「娼妓義務戯」というのは、坤伶に娼妓兼業のものがいたからだ。それは、一九〇八年出された『北京誌』に「別に坤戯なるものあり。又女戯といふ。此は歌妓の輩が演ずるところの劇にして、普通の演劇に比すれば稍下等のものとす。戯館(筆者註：劇場)に於て演ずるを得ず。専ら堂会戯(筆者註：会館という同郷会館、同業会館に呼ばれてやる芝居)にて演じ、又人の招きにより其宅に至りて演ず¹²⁾」とあるように、「坤伶」のほとんどが「娼妓」であったからだ。それが、既述のごとく、坤伶を差別の対象と看做す一大原因であったが、社会もそう見ていたし、自分達も多くはそれに甘んじていたのである。それは、北京・天津だけの状況ではなく、南は上海、漢口、北は宮口、瀋陽、ハルピン等など、どこでも同様であった。

さて、この年の三月上旬における男優達の義挙や天津の娼妓演劇がすでに実施されて、天津同様に、北京の娼妓にも呼掛けが行われた。『順天時報』「詳記花界慈善特別大

会」に「梨園の子弟が団体を組織し、福寿堂で責任を果たした演劇収入によって、江北水害の義捐金を募ってより、ある人が花界に呼掛けて、清吟小班(筆者註：後述)¹³⁾全体が連合して慈善会を結成した。そして、桂喜班となる娼家の娼妓・桂鳳が発起人となり、雲楽班の玉芙が第一賛同者となった¹⁴⁾」と記しているから、明らかに梨園の弟子(当時、女優はいなかったから俳優とは「男優」を指す)が上演した後に、篤志家たちの勧めでこれに呼応して娼妓たちも立ち上がったのである。当時の義務戯は全く演劇界だけの自発的壮挙と言うわけではなく、篤志家の呼掛けや助力があったけれども、しかし、篤志家とて劇界に呼応する者がいなければ会は成立しない。だから、開明的男優であった田際雲の存在は大きかったと言わなければならないだろう。彼は「娼妓義務戯」にも参与していたのである。とはいえ、娼妓たちが、単に被災者に対する同情だけでなく、自覚的に広く社会に救済することを訴え、懸命に努力し奔走したことに重大な意義があった。

次に『勸北京花界衆姉妹興辦慈善会浅説』と題した、発起人・桂鳳の同業娼妓達への演説稿を見よう。¹⁶⁾

「姉妹のみなさん、江北の水災のことを聞きませんでし

たか。話せば悲惨極まることですよ。：江北は昨年水が出てから無数の人たちが溺れ死に、無数の田畑が流され、数十万の人が食べ物も着る物も全然ありません。それに子供を売っては何食かの食事に換えています。：：私達の皇太后様、皇帝様は民の命に御関心下さって、すでに援助金を下賜し災民を救援されましたが、人数が多すぎます。：：ですから南方の同胞はみんな義捐金を募って救済しようと提案しています。姉妹の皆さん、今年厥旬（筆者註：後述）に行きませんでしたか。中国婦人会があるでしょう。そこ

が江北賑款区です。人様を見て、自分達自身を見てください。同じ四肢五官を具えています。人様に慈善心があるのに、自分達にはないと言えるでしょうか。人様が同胞を救う方法を考えられたのだから自分達ができないと言うことがあるのでしょうか。：そこで私達は北京花界慈善會を興し、北京花界女同胞を連合させて、二日間歌うしかるべき場所をさがし、切符を売るつもりです。入ってきたお金は、全部江北の義捐金にし、いささか国民の責務を果たしたい所存です。わたくしはこの事が必ず成功すると思います。ここに、「人様」といっているのは、近くは田際雲達が尽力した京劇男優達の義務戲があり、それに先立つ、義拳

がすでにいくつかあった⁽¹⁶⁾。前述したように、天津では劉子良らの提唱で「芸善會」が結成され、大小の慈善公演がなされていた⁽¹⁷⁾。こうした気運の中で、北京娼妓義務戲の計画は発案され、桂鳳の演説にあるように、彼女達は「国民の責務を果たす」ためにこの義拳におよんだのであるが、じつは娼妓の彼女達は、もともと「国民」、つまり人間の仲間に入っていない存在であった。それが、自分達が「国民の義務を果たす」ということは、すでに自分達が「一個の人間」として、平等の権利を主張しているということでもあろう。

男優達の慈善演劇がおわってから、花界の清吟小班は慈善會を結成して、上記の桂鳳の「演説單」を印刷して各班に配ったのである。それによって、賛同する娼妓は会員として名を連ねるようになると呼掛けたところ、多くの賛同者が現れた。そして、義務戲の上演場所を天寿堂と決め、午後一時から六時まで、暫時二日義務戲を上演するというはこびとなった。

三 北京の娼妓と劇唱

ところで、娼妓の重要な技芸の一つは歌うことであるが、

その歌にはまず「大鼓」という主に北方に流行していた語り物があった。わが女義太夫のように、浄瑠璃を女性が歌うのを好む客層があり、娼妓でなく専門の「大鼓」を歌う女性もいて、「鼓姫」とも称された。さらに、「小調」と呼ばれた小唄もあったが、それに伝統演劇の歌(劇唱と仮称する)も、娼妓の技芸として客に好まれていた。北京の客の多くは芝居好きであったので、娼妓にも、京劇の歌を得意とするものがいた。例えば、小葡萄なる娼妓を「名は洪翠菱、……年わずか二八(筆者註：十六歳頃)、まさに妙

齡、二簧、西皮(筆者註：ともに京劇の節)、大鼓、小曲

などを上手にうたう」というように、娼妓の紹介には、劇

唱がうまいと必ず挙げている。また、新室のように京劇の

伴奏楽器・京胡を上手に弾ける娼妓もいた。

さて、北京の娼家はランクの上から「清吟小班」「茶室」「下処」「小下処」の四種あった。⁽²¹⁾各娼家は毎月、その格式によって税金を納めると同時に娼妓もその位で税金を納めた。北京の娼家には、元々所謂「南班」はなかった。「南班」とは主に上海など南方から来た娼妓の所属する娼家のことである。清朝政府は、満州八旗の墮落を恐れて、芝居小屋と遊里は内城に置かなかつた。そこで、当時「八大胡

同」と呼ばれた外城の西側に歓楽街を許可したのであるが、そこに二十世紀に入る頃に、上海から花宝琴という娼妓が来たところ、大いに評判をとって大儲けした。上海に帰ってから、それが喧伝され、それ以後、次々に上海の娼妓が北京入りをするようになり、彼女達が身を寄せる娼家を、本来の北京を中心とする北方娼妓と区別するようになって、「北班」「南班」の呼称ができたのである。その後、南班は日々に勢力を増し、一九〇六年には十軒⁽²²⁾(翌〇七年は十五軒)を数えるに至ったという。

かくて、北京の娼家は北班と南班ができたのであるが、そこに所属する娼妓は必しも常住しない。例えば、当時有名な「花園泰斗(筆者註：花柳界の大御所)」の林黛玉も上海から来た娼妓であったが、彼女は松江府出身で(胡弓、琵琶を稽古し、京劇や梆子の歌を習って、しかも直ぐに上手になった)、上海の坤劇場であった群花茶園に出演し、当時は常時、上海、漢口、天津、北京などの諸都市を往来している。⁽²³⁾後述する花四宝も群花茶園に出演した後、天津に北上し、同じく上海から来た李文韻と北京から営口にまで行っているし、向月楼も漢口、九江などを巡回して、北京の南班に入った女優である。⁽²⁵⁾

⁽²⁵⁾蘇州や上海出身の南班娼妓達も、京劇などの劇唱ができた。なぜなら、京劇は十九世紀の半ばまで上海では見られなかったが、民哀の『南北梨園史略』⁽²⁶⁾によると、一八六八年(同治五年)に羅逸卿が滿庭芳劇場を建設してから、まず天津の京劇役者が上海入りし、翌年には劉維忠が丹桂戲園を建て、今度は北京の役者が上海の舞台に立った。これが大当たりして、京劇は上海に根付き、上海の娼家でも京劇の歌がうたわれるようになったのである。そこで、南班の娼妓たちの中にも、京劇や北方の地方劇であった「河北梆子」(当時の北京では「秦腔」と称した)の歌をうたえるものがかかりいたのである。晩清の北京で演劇改革を強力に推進していた役者が、既述の田際雲であった。彼は河北梆子の名おやまで、御前芝居をするほどの名優であったが、十五歳の時(一八九七年)に早くも上海で梆子劇を上演しており、⁽²⁷⁾上海にも河北梆子が広まっていたし、天津は北京同様に河北梆子の拠点と言うべきところであり、しかも河北梆子の坤伶が多かった。花四宝などは、その代表と言える。

四 娼妓演劇の上演に漕ぎつけるまでの諸問題

さて、いよいよ義務戲の上演が近づいてきたが、座敷芸の娼妓達に素謡はできても舞台で演じられるかという問題が起きた。だが、当時の娼妓は巡回していたので、調べてみたら、坤劇が許されていた天津で出演したことのある四人の娼妓がこの時北京にいた。⁽²⁸⁾この四人には、京劇の壮年の立ち役「老生」が二人、若い男の「小生」役が一人、そして色おやまの「花旦」役が一人いたので、多くの芝居ができると思んだのである。

ところが、上演するには娼家にはない扮装の衣裳、被り物、履物が必要である。これまた一大問題であったが、そこに奇特な人物が現れて、新しい物を調達すると申し出てくれた。⁽²⁹⁾そして、いよいよ義務戲の認可を警庁に申請し、新曆の一九〇七年四月三日と四日の両日、天寿堂で上演するはこびになった。その頃、「北京女学慈善会」が瑠璃廠⁽²⁹⁾で、山海関から「中国男女馬戲」を呼んでサーカスをやり、その収入を女子教育に当てた。その名称が紛らわしいので、「花界賑災会」と改名して、一日繰り上げて廿、廿一にやることにしたのである。⁽³⁰⁾

そこに、またしても障害が生じた。天寿堂の主人が「頑固迷信派」で、娼妓が舞台上に上るのを拒否したのである。

しかし、「頑固派」と目されていた三慶園の主人・張少鵬は、意外にも自分の小屋を貸すことを願っていたのである(註 同上)。三慶園は当時芝居小屋が並んでいた大柵欄に位置し、しかも折悪しく他の三劇場は映画を上演して使えなくなったので願ったりかなったりと安気したのであった。これで当局の許可も下りて、問題なしと思っていたが、慮外なことが起こった。その時、三慶園を借りていた長春班の役者・陸華雲が、この娼妓出演に猛反対し、ついに三慶園は断念せざるを得なくなったのである。そこで、彼女達はついに慈善事業に熱心な李鴻儀の福寿堂を借りることになった。⁽³²⁾このような紆余曲折をへて、ようやくに福寿堂で四月六日、七日、午後六時から十二時までと決まったのは、四月に入ってからのことであった。⁽³³⁾

五 北京娼妓義務戯の上演

さて、第一日目は、六時前から発起人・桂鳳や玉芙ら代表が到着し、会場の整備、段取りを執り行った。出演者は予め出演時間を指定して、混乱しないように配慮されていた。

た。娼妓が到着してから花を一輪買い(これも寄付になる)、それを襟元に着けて「京劇」、語り物の「大鼓」、小唄の「小調」、北方の地方劇「梆子」などを次々にうたって、喝采を博していた。十曲、二十曲とうたった後で、舞台を下り、募金して、二階席もまわって集める。そして、北方一と称されていた玉芙が「大鼓」を語ると「拍掌声、大震如雷」といった盛況であった。しかし、これらは語り物、あるいは芝居の素歌いで、娼家でも披露されているものだった。そしていよいよ、第二日目、光緒卅三年二月二十四日、西曆一九〇七年四月七日こそが、北京近代坤劇の記念すべき一日となった。彼女達は、週末でないと義務戯をやっても観客が来ないと、土曜日曜の二日を望んだ。この七日は、まさに日曜だった。金花と玉花が当時人氣のあった「富春楼」を演じたのである。⁽³⁴⁾もう、夜の十一時にさしかかる頃であった。

その場面を次のように記録しているので、聊か詳しく見ていることにしよう。結果的には、公開された近代北京坤劇の嚆矢となったからである。

忽聽得班鼓湯鑼一響、繡簾一揭、玉花扮旦角出現。滿身行頭、鏢亮異常、万般春色、光輝照人。唱的是梆子、字字

清脆、声調婉朗、態度更添出無限嬌媚來。看戲的人、於是時、齊聲拍掌歡笑、真是如同雷震一般。

中国芝居独得の開演の太鼓と銅鑼が打ち鳴らされると、刺繍の施された錦の揚幕があがり、玉花が女性の役の扮装で登場する。「扮」とは舞台の化粧をしていると言うことである。かつ「滿身行頭」という四字が、北京の公開された舞台で当時全く見られなかった坤劇が本格的に上演されたことを明示している。「行頭」とは、舞台で着ける衣装、被り物、履物すべてを指す専門用語である。だから、舞台の化粧をし、衣裳などを着けて本格的な芝居の扮装で登場して来たのである。さらに、第一日目の素歌いでは見られなかった所作に言及しているところも重要である。

随又見金花扮小生出現。旦角迎接談話、開櫃狀、取銀狀、通給小生狀、手法歩法、絲毫不乱。随又对坐談話、随又一個人獨唱、随又取活計做活狀、穿線狀、據線狀、彈線狀、拉弦子的、又故意代作彈據聲、却如同出在旦角的口中、演到此時、台下的掌聲、又如同万斛松涛随風湧來。

「裁縫道具を取る」「糸を通す」「糸を滑べりやすくする」などの所作をして、そして「糸を弾く」所作のときに、胡弓弾きが弦をはじいて合わせると、観客席からどっと拍手

が沸いた。扮装し、衣装を着け、そして演技をする。これは娼妓が娼家で素歌いしているものとは、全く異なる演劇である。ここに、北京の公開された舞台では全く見られなかった「坤劇」が、登場して来たのである。だから記者は、北京戲園、向來没有発現過女戲、活到七八十歲的老頭兒也都沒有見過這女伶、所以這一齣戲唱出、簡直的如同景星慶雲一般。況且所演的旦角、有聲有色、絵形絵意、比小朵、小如、小瓊等人、強的多多。衆人見所未見、那能不全体歡迎。

と、「北京の劇場では、これまで女優劇というを目にしたことがない。七、八十歳のお年寄りでもこの女優というものを見たことがない。だから、この芝居が上演されるや、全く目出度い星や雲が出現したようなものだ。いわんや、演じた女役は演技も上手で綺麗だ。小朵、小如、小瓊（当時の人気青年男優）らよりずっと素晴らしい。多くの人は見たことがないものを見たから、みな大歓迎だ」といい、さらに、以下のように述べる。

須知他二人、本在天津落子班、時常演戲的。前天因為要演富春樓、前三天在雲吉班練習很熟、所以歩法□眼、絲毫沒有錯誤。

「この二人は天津の落子班の劇団にいて始終出演していた。『富春楼』に決まってより、娼家の雲吉班で稽古をしてでき上がっているから、舞台の足の運びも歌の間の全然過ちがない」と大変な賛辞を与えているのである。

かくて、北京初めての娼妓義務戯は、支出を除いて、二千五百余元の義捐金を得て、江北、皖北の被災者に半分ずつ送ろうとしたが、各々、一三五〇元にならなかつたので、不足分は発起人の桂鳳自身が埋めて送ったと言うのである。この桂鳳の壮挙も賞賛すべきであるが、この娼妓義務戯こそが、後の北京における坤劇公開上演の魁となったのである。この坤劇を観た客は、「まだ無限の未練を残し、再演に遭遇する良い機会を待ち望む。玉花はこれほどの力量があり、本人もとても出演して日頃の妙技を披露したいとの所存である。今後は機会があるかどうかかわからないが、それは未来のことで予測はできない。成り行きを見てみよう」と述べて、坤劇をまた観劇したいという無限の願望をもらしているのである。³⁶⁾

桂鳳が発起人となって举行了た娼妓義務戯は、北班清吟小班のものであった。これに続いて、今度は南班が、「清吟南班助賑義務大会」を計画した。その中心になったのが、

最も教養の高い娼妓と称された李文韻と、名女優の誉れ高かった花四宝であった。二人は当時の北京の南班十五家に呼掛けて、福寿堂を借りて義務戯をやることを決めた。当日、詩文の才を自負していた李文韻は、演説をしてから、自分の写真も掲載した自作の詩集を印刷し、それを売ってこれも義捐金の一部とした。彼女たちがこの義挙に出たのは、ただ北班に対抗してのことではない。「因現今捐款、

已成弩末(筆者註：今の義捐金はすでに一頃の勢いがなくなつた)、つまり前年から数回の義務戯が行われて集客能力もすでに落ちていたから、「特別挙動」でなければ観客は来てくれないという情況にあつた。当時、北班の娼妓より、教養や見識だけでなく、さらに技芸も上であろうと看做されていた南班娼妓たちが、この義挙に出ても怪しむに足りない。いわんや、彼女達の出身は、被災地域の近くで、南方では娼妓義務戯がすでに行なわれていたのである。¹⁶⁾

北班の翌月下旬、五月二日と二日に南班の義務戯も举行された。だが、それは当初の期待に違ふものであった。

まず、彼女達は北班の後、なるべく早くやりたかつた。しかも北班が素歌いだけでなく、「衣裳を着けての演劇」が大喝采を浴びていたことに刺激を受けて、上演を念頭に

入れていたから、その準備に余念がなかったのである。発起人の花四宝一人では不足である。そこで、彼女は当時天津の著名坤伶であった「色芸双佳、大名鼎鼎」の尤金培姉妹を天津から呼び寄せた。売れっ子・尤金培の逗留日程の都合などで延び延びになって、五月十八、十九日の二日と決定した。⁽³⁸⁾それは、彼女達が義務戯は土日がお客が入るからと、態々日を遅らせたのである。ところが、清朝時代には「忌辰」といって、皇族の命日や祭祀の日は歌舞音曲を禁止していたのであるが、この二日と翌日までがまさにそれに当たってしまった。⁽³⁹⁾結局火、水曜日の二一、二二日になってしまったのである。

さらに、彼女達の期待を裏切ったのは、すでに義務戯に飽きが来ていた観客に新奇なものを見せようとして「特別に花四宝が天津から尤姉妹を招き数幕の文明新劇を試演しようとした」のであるが、「奈何せん、北京は風気がまだ開かれておらず、坤劇は上演に支障あり」と拒否されたことである。そこで、空しくも「戯衣行頭（衣裳・被り物・履物）はすでに準備万端調べていたが、上演できなかつた」のであり、「それ故に、会場には空席ができて満員にはならなかつた」のである。⁽⁴⁰⁾結局、李文韻と花四宝主催の

「清吟南班助賑義務大会」は、所期の目的を果たせなかつた。北班の娼妓達も応援に来た。なぜならば、個別の素謡だけでは七十二家の北京娼家のうちで十五家ほどしかない南班の娼妓で歌えるものは限られていたからであり、芝居なら時間をもつが素謡では、二日は充たされなかつたからである。結局、語り物を加えて素謡三十三曲に終わった。⁽⁴¹⁾もちろん、花四宝や尤金培といった坤伶の大スターが出演したのであるから、「楼上楼下の拍手の音は、新年の爆竹よりもにぎやか」であつたとはいえ、単なる素謡に終始し観客の期待を裏切つたのである。

その後、義務戯の坤劇はすぐに上演されなかつたと思われるが、花四宝ら義務戯では悔しい思いをした彼女達が、意外にも衣裳を着けて、北京の観客の前に登場して来たのである。それが、東城長安街に位置する、義和団事変の後に日本公使館などが置かれた場所に臨時に建てられた仮設の「日華戲園」の坤劇である。これは、最初「馬戲団」として広告していたが、やがて五月二十八日には「文武女馬戲」という広告が出た。これは明らかに、坤劇嚴禁の北京において、直接的表現を避けた婉曲表現であるが、歌をうたう芝居「文」と坤劇「女戲」を上演すると、誰しも分か

るような広告である。花四宝らの義務戯の日と、この開演(五月二七日より公演開始)の日にちが近いことから、彼女達が天津から持参した衣裳など扮装に必要な品物が、そのまま活かせることになった。ここで、北京の客はついに坤劇の上演を見ることができたのである。とはいっても、ここは日本の居留地であり、しかも建物は仮設であって、風雨を凌ぐことはできなかった。

五 娼妓の屈辱と奮闘

この後、若い男優達を中心に「梨園子弟」による「伶界賑濟会」が、六月十七、十八日に、やはり福寿堂で上演された。⁽⁴²⁾もちろん、彼らは日常から常演しており、ただ「義務戯」としては壮年男優、さらに女性演劇より遅れたことになる。その発起人の一人で、後に梅蘭芳の相手役をした姜妙香は、当時開明的な青年役者として知られていたが、その彼は、「我の人たるは下等社会の人なれども、我の心は下等社会の心にあらず」と欧州の俳優のように同等の地位に立てることを期すと言っている。⁽⁴³⁾男優ですら、かく差別されて当然の時代に、坤伶ならなおさらである。いわんや、娼妓の坤劇というものを、当時の北京は認めなかった

のである。

北班義務戯の発起人・桂鳳の演説を紹介したが、次に南班義務戯発起人李文韻の演説に耳を傾ければ、さらに嘆息させられるであろう。「：花界の二字を申し上げれば、わたくし李文韻は切なく、心が痛み、恨めしくもあり哀れも覚えます。目下は、望むべき進歩はありませんが、将来には希望がたくさんあります。お役人様、旦那様方。お笑いにならないで、わたくし李文韻の申し上げることをお聴きになって御示教下さい。わたくし達のこの稼業はその昔落花に擬えられました。：まるで花がひと度落ちるともう立ち直る日は来ないように。(でも)：およそ一人の人間が思想、志を持ってば、どんなことでもやり遂げられます。孟子に：悪人ありと雖も齋戒沐浴すれば、もって上帝に事うるべし、とあります(筆者註：「離婁下」。この「悪」は「醜悪」の意)。古来、殿方の中でも、本は卑賤な身であったのに、後に宰相將軍になられた方々も少なくありません」と述べた。続けて、古からの名妓、蘇小小や薛濤などを挙げ、「千秋の名譽を博した」と賞賛し、さらに歴代の名妓の事跡を連ねて、高徳な娼妓が万古の芳名を歴史に留めていることを述べ、娼妓に対する侮蔑を改めてほしいと

訴えた。ここに自分達が娼妓の身ながら公益に尽す覚悟を示したのである。⁽⁴⁴⁾

李文韻の話から、娼妓に対する蔑視の深さ、善意の意志を懐いても、やはり屈辱を受け、いかに辛酸を嘗めなければならなかったがわかる。たしかに、娼妓は世界のどこでも軽蔑の対象である。しかし当時、社会の動乱に良家の娘で身を沈めるものが少なくなかったので、決して全ての娼妓が無教養で下卑た女性というわけではなかった。彼女のよように、「全国花界中、最有文明名譽、思想最高者」と称せられた詩文が書ける名花もいたのである。まして、当時北京の識字率は、一、二割といわれた時代である。

このように一般人よりもはるかに教養のある高級娼妓は、一流人と交わっていたばかりか、当時の繁華な海港の商業都市を巡って、様々な新しい文明と情報を得ていた。⁽⁴⁵⁾ だから、慈善事業に積極的だった天津社会の空気を、普通の北京の良民よりも、はるかに熟知していたのである。そうした高級娼妓で、「詩文と書道の才」に恵まれて「群花の冠」と賞賛されていた李文韻が、最も人々を震驚させたのは、「改俗半日女学堂」という娼妓学校を設立しようとしたことである。李文韻は娼妓が余りに「無思想」「無教育」だ

と嘆いて、この挙に出たのである。設立のために、各娼妓に毎月学堂資金を募らせて、役所に申し出たところ、役所も極力賛助してくれ、ことは成功せんとしていた。その矢先、思わぬところから、横槍が入り、役所もやむなく認可しなかったのである。強力に排斥した者、それは「全滬女学堂」のエリート女学生達であったのだ。役所に送られた書簡には「この挙動動けば、我輩女学生の名譽をそこなう。宜しく急いでこれを止めよ。許すべからず」と書かれてあり、当局も女学生の不満が治まらないのを見て、娼妓は彼女の救済所にもなっていた「済良所」へ行けば良いのであって、「同情を表わすなかれ」と布告し、ついに李文韻の熱情は泡と消えてしまった。⁽⁴⁶⁾

李文韻は先の演説で、「今日の世界、人々がみな勉強を重んじているの見て、娼妓学校を提唱しました。我々の姉妹達もここでいささか勉強し知識を得れば、将来自立を図れますから。ですが、計らずも：わたくしが女学の名譽を傷つけたと言うのです。このような稼業に身を沈めて、勉強をすることも許されません。この一件を申し上げると、本当に切なく涙がこぼれます。己の学ぶことは叶わないことになりましたが、人様のためになることはできます」と

述べてから、南方の江蘇安徽では死亡、餓死、凍死者が数百万人を下らないと惨状を話し、「お役人様の奥様、お嬢様が義捐を呼掛けているのに、落花の身でお手伝いして責任を果たせず、まことに内心忸怩たるものがございます。

その後、数種の慈善会が開催されています。私共南方(筆者註：李文韻は上海出身)の水災なのに、北班の方々がこのように熱心にされているので、慙愧に堪えません。：：わたくし李文韻は先ず江蘇安徽の災民に代わってお礼申し上げます」と結んでいる。⁽⁴⁶⁾ 実際に、娼妓達はこうした義挙によって、自分達の仕事をおいて駆けつけ、しかも芸を披露し、義捐金も支払ったのである。それは偏に「万金でも買いたい名誉を享ける」ためであった。⁽⁴⁷⁾

娼妓義務戲が上演される一年前に、北京の名優楊小翠や娼妓の玉仙など有志が国債のために寄付した義挙が新聞に報道された。これは演劇をして得た収益と言うわけではないが、娼妓も一個の人間として社会的責任を負うことができることを世に知らしめようという意識の表れである。⁽⁴⁸⁾

坤伶の義務戲がなされることを賞賛した天津『大公報』(○七年三月一九日)は、「不思議なのは京師の高官数多いのに手を拱いて傍觀し一言も発しないことだ。：某尚書

(筆者註：長官)は譚鑫培を呼んで演じさせ、百金も払うのに義捐金は一文も出さない。これぞ中国の高官たるゆえんである。哀れなるかな」と、誹っているが、娼妓たちは被差別職種の男優達と同様に、この義務戲を利用して自分達が「一個の人間」として公認されるよう、地位向上のために、懸命に努力したのである。近代演劇史の中で、北京の商業劇場が女優に解放されるということは、まだまだ次の道を歩まなければならなかった。

その翌年一九〇八年に、女学校の経費にあてる義務戲として坤劇を申請したのに、許可されなかった。⁽⁴⁹⁾ これは清朝政府が劇場建設を許さなかった内城であったこともあるかも知れないが、結局、北京では義務戲でさえも坤劇はついに許可されずに、一九一二年の民国元年、民国政府の認可を待たなければならなかった。あるいは、そうであるからこそ、民国初期の爆発的な坤劇人気を誘発したのかも知れない。そうした清末北京の暗黒状況下で、一九〇七年四月七日に福寿堂で公開上演された『富貴楼』こそは、北京近代坤劇史を開いた第一劇として特筆すべきことである。同時に娼妓のなかから有為な人物が登場して、初めて実現できたことであって、それによって形成された新しい思潮や

氣運が、その後の演劇改革や社会思潮に一定の影響を与えて、ついには民国坤劇の盛況へと導いたことを決して忘却してはならないであろう。

(1) 東京大学『東洋文化研究所紀要』八二冊九一頁〜三二六頁(一九八〇年 所収) *以下、西暦は特記しないかぎり一九〇〇年代で、その際は「一九」を省略して「一九〇六」なら「〇六」と略記する。

(2) 『順天時報』〇五年四月七日(本社説)「論社会對於報紙之感情」。

(3) 『順天時報』〇六年十月十二日(京師新聞)「准演影戲規則」に「一 開演之時刻夜間以十二鐘截止。…一 男女分別座位」とある。

(4) 廖奔『中国古代劇場史』図七一(中州古籍出版社 九七年 鄭州)に「丹桂茶園」が掲載されており、また『人鏡画報』(是非場)(人鏡画報社 〇七年 天津)にも婦人客が描かれている。

(5) 『順天時報』〇六年十月十八日「林黛玉到京」に「黛玉…在上海張園女戲班内(南方俗話、叫做猫兒戲)時時出演」とあり、同紙十一月二十四日「文韻閣赴津」に「曾經在上海群芳茶園、演唱猫(毛)兒戲的」と言っている。ま

た、当時、上海の新聞『民立報』にも、群芳茶園の演劇広告が連日出ていた。また、天津では天津『大公報』〇三年七月九日(允宜查究)に「近来各戲園、多以女優演唱戲劇議者多非之。然女子登台、為西国之常事、亦無足怪」とあり、同紙〇四年八月二十四日(附件)「說戲」には「自從庚子乱後、戲園子唱戲 全搭配女角；直到如今、戲園子要是没有女角、簡直的没人聽去」、同紙同年十二月三日には(本埠)「女伶被拘」に「津埠女優之盛、甲於各處、已登台者二百名左右」と述べ、同紙〇五年七月十日(本埠)「天津泉示」に「查津郡女戲之興漸、由德國租界而開。彼時雖女角登台、尚無男女合演；自庚子後、竟敢男女合為一班」いっているから、天津の女優は最初ドイツ租界から出演するようになって、庚子(一九〇〇年)以前から女優が活躍していたが、庚子の義和團事変以後は、各劇場に女優が加入し舞台に出演する女優だけで二百名ほどを数え、男女が共演するようになって、女優なしでは客が呼べないといった状況であったという。

(6) 天津『大公報』〇四年八月三日「不改惡習」、同月二十六日「風化攸関」、同紙〇五年一月二十四日「關心風化」、同紙同年三月二十七日「伝説將禁女戲」。

(7) 『順天時報』〇六年三月二十三日(京師新聞)「婦女劇学演戲」に「於三月初五、初九、十二日、演戲三天」とあ

り、新曆同年三月二十九日、四月二日と四月五日の三日上演した。天津『大公報』〇六年三月二十五日〈北京〉「記婦女勸学会」も、このことを伝えている。こうした新作の推奨は、同年に「巡警庁」から、当時流行していた演目の内、二十四番が禁演リストに載り、役者達が新しい「改良演劇」を求めていることもその原因の一つであった(『順天時報』同年十月六日「飭呈改良戲單」)。

(8) 「晚清北京の戯曲改革と秦腔」(東京都立大学「人文学報」一一二号一九七六年)。

(9) 『大公報』〈北京〉一九〇七年三月八日「義務戲会助善」。

(10) 天津『大公報』同月卅日〈北京〉「普仁会流行演戯」の「京師善仁義会、為勸募江北水災、開演義務戲、九日所入票備捐款、為數有限。……十六日及十九日仍假福寿堂、開演新戲、特約汪桂芬、譚鑫培演戯。男女客座」及び『順天時報』同月二十六日〈廣告〉「福寿堂接演義務戲」。

(11) 天津『大公報』同年同月二十六日〈本埠〉に「記興益善会」に「天津自公益善会演戯籌賑後、遂有芸善会、広益善会、及花界慈善会蟬聯、茲興盛戲園、復有興益善会之萃、於昨十二日、特邀名角、昼夜開演新戯、□款充江北賑捐。是日午後、演戯少停、由英敏之、劉子良両君、登台演說開會大意、□勸座客随意捐助。晚間座客甚滿。……」という。

(12) 『北京誌』〈演劇附堂會戯〉(清国駐屯軍司令部編輯 博分館 明治四一年)。

(13) 娼家は「〇〇班」と名乗っていたので、民国以後になつて、それまで「玉成班」というふうな劇団名を「〇〇社」と改名し、遊里と区別しようとした。

(14) 同月十三日に「自從梨園子弟結合团体、在福寿堂尽義務完座助善賑捐江北水災起、便有人向花界遊説、勸令聯合全体清吟小班、創辦慈善会、即有桂善班・桂鳳詞史、自認為慈善会發起人、又有雲樂班・玉芙詞史、首先贊成」と記す。

(15) 『順天時報』〇七年五月二十五日「福寿堂清吟助賑義務会紀盛(三)」に「前後兩日、在会中尽義務的、……田際雲、……在堂中堂外、前台後台、往来奔走……」とある。

(16) 『順天時報』一九〇七年三月十三日に「諸位姊妹呀。聽見說江北的水災沒有味。說起來、可慘極了。……江北自去年發水、淹死了無數的人民。冲壞了無數田産、幾十方噸的穿的一概沒有……。還有把孩子卖了；換了頓喫兒。……我們皇太后 皇上関心民命、已竟發下帑銀、賑濟災民。然而人數太多、……所以南省的同胞、全部提唱捐款賑災。……北省的同胞、現在提唱的這局事、也都熱心。……諸位姊妹今年沒上廠甸去嗎。廠甸不是有中国婦人会嗎。那就是為江北賑款嘔。看看人家、看看我們一樣的四肢五官、人家有慈善心、

我們就沒有慈善心嗎。人家能想法子、救同胞、我們就不能想法子同胞嗎。……所以我們才打算、舉辦北京花界慈善會：定打算把北京花界同胞、聯合在一起、找一個相當的地。如唱兩天曲兒、用壳票的法子壳座兒。然後把所進的款項、統通的歸入江北賑捐、也算我們少少的盡點國民義務。我想這「事、一定得辦得成的。發起人桂喜班桂鳳、首先贊成人雲樂班玉芙蓉」と載せる。ここで、南省の同胞と言っているのは、天津で刊行していた『醒俗画報』の丁未（一九〇七年春）に娼妓・李金桂の呼掛けが「附録李金桂捐啓」（侯傑編著『醒俗画報』（精選）天津人民出版社 二〇〇五年 二四七頁転載）として出ており（李金桂は後述註17「記永順茶園倡辦賑捐」にあるように「江北救濟慈善劇をやっている」、それには、「去年上海各花界中人演了一晚上戲、共收入七千多元、全數作為賑濟」と記し、「日本の芸伎也演戲助賑」とあって、日本人も救済しているのだから、中国人が行なわないと言っているかと思えてくる。この李金桂は『順天時報』〇七年四月十九日〈津門名花小史〉に天津の最も有名な娼妓と紹介され、江西北水災の助賑發起人として、名譽は天津に鳴り響いていると賞賛されている。もと北京人であったが、〇六年天津に移った。讀書を好み楷書が上手だと褒められている。既述の桂喜演説は、天津の娼妓であった李金桂らと影響しあったものだ

が、上海の娼妓は前年にこうした義挙の先鞭をつけたのだとわかる。

(17) 天津『大公報』一九〇七年三月十七日、〈本埠〉「記永順茶園倡辦賑捐」に「自劉子良君創辦、芸善會籌江北賑捐後、各茶園聞風者相繼而起」とある。

(18) 『順天時報』一九〇六年十月十四日「小葡萄遷移」。

(19) 『順天時報』〇六年八月十九日の上海人・宝金、同月二二日の蘇州人・小二保、同月二五日の蘇州人・小紅は伴奏の胡弓の弾き語り、〇七年一月十二日の玉宝玉などが挙げられている。

(20) 『順天時報』〇六年十二月三日「遊飲紀事」。

(21) 『順天時報』〇五年十二月二十八日〈京師新聞〉「樂戶捐章詳誌」には看板を分けて、清吟は金地に黒、茶室は黒漆に金字、下処は白ペンキに黒字、小下処は同じだが半分の長さとなり、娼家の等級は外から見て一目瞭然であった。

(22) 『順天時報』〇六年八月二十九日〈花春秋〉「鳳仙」に「北京城本無所謂南班、自從前幾年、花宝琴由上海初到京、住在梁家園幾間破屋內、日日車馬盈門、……所以空手而來滿載而歸。回南後、上海群花、喧伝南美、到北京有如景星慶雲。只須秋波一笑、使得黃金万金」とある。

(23) 『順天時報』〇七年二月十七日「花界開歡迎會」に林黛玉について「十五歳時、曾嫁給人爲小屋（筆者註：妾）、

後又輾轉到松江、暗密完笑。：末後、到上海、改名林黛玉、学胡琴、学琵琶、学小調、学京調（筆者註：京劇の歌）、学梆子。一学便會、一唱便工。：：後又入女戲班（筆者註：女優劇団）、登台演舞。歌曲一天進化一天。声名便也一天盛大一天。於是自題為瀟湘館、從此馳名震動春申浜。今又南到漢皋、北至京都、全国大都會、幾乎無人不知黛玉的芳名」とあって、十代に売笑し、上海では京劇から梆子劇まで北方の劇唱をうたい、さらに坤劇団に加入して芝居をしていたことがわかる。

- (24) 『順天時報』○七年三月二四日「文韻閣花四宝回京」に李文韻と花四宝の上海娼妓が「去年在南林坊的文韻閣花四宝兩名花、於臘月二十八日出京後、在天津過年。今年正月初四日、又由天津乘坐火車、到宮口榮發茶園唱戲」とあって各地を巡回して活躍していたことがわかる。

(25) 『順天時報』「月夜色雲双佳」。

- (26) 『菊部叢刊』（交通図書館 一九一八年 上海）所収『南北梨園略史』の「歌台新史」。

(27) 『河北戲曲資料匯編』第十三輯（河北省文化庁 一九八六年 二一頁）に「十五歳の田際雲、：上海金桂園派人邀田際雲去上海。毎月包銀百両、：每貼一劇、座無虛席」とあり、その後の上海での活躍など二三頁まで書かれている。

(28) 『順天時報』○七年三月十三日「詳記花界慈善特別大

會」に「又詳加調查、知道雲吉班玉花、金花姊妹、二人在天津時、曾經登台演過戲齣的。並知湧泉班玉宝翠芬二人、都是唱鬚子的。玉花、金花二人、一是唱小生、一是花旦。有這四人、便可編治許多戲齣。決計令這四人先後配搭更換、登台演唱。四人也都認可」とある。

- (29) 佐藤三郎『北京大概』（敵甸の正月市）（北京写真通信社 大正八年）に、「敵甸は瑠璃廠中間の路北に在り、今其の地に海王村公園を設けらる」というが、清朝時代は官窯があったところで、かなり広い空き地だった。

(30) 『順天時報』○七年三月二四日「花界賑災會定期會辦」。

(31) 『順天時報』○七年四月二日〈京師新聞〉「花界賑災會之阻力」。

(32) 『順天時報』○六年十一月一日、〈京師新聞〉「演劇上国民捐」。李は前年晩秋、国債のための義務戲をしたが、そのときには女性客だけを入れるという義挙も行った人である。福寿堂では、田際雲の『惠興女士伝』の初演も行われた。

(33) 『順天時報』○七年四月四日〈京師新聞〉「花界賑災會開辦期」。

(34) 『順天時報』○七年四月九日〈白話〉「福寿堂清吟賑災會紀盛」に「二月二十四日晚六点钟、北京清吟小班、在福

寿堂内、大開歌曲賑災會。一時臨會時、不下一二百人。為北京從來沒有見過的第一次盛會。……各班中人來到後、先在接待處休憩、並買記念花、和報告認唱的戲曲名。記念花每人一朵、每朵一円、佩在衣襟上。戲曲每人認定一齣、或是黃、或是西皮、或是大鼓、或是小調、或是梆子。……開會時、先敲打鑼鼓鬧台。……最特色的是泉湘班・洪蘭芳唱二進宮、德福班・小翠唱大鼓、……唱了一二十齣後、桂鳳玉芙、銀福三人、便下台募捐。一拿捐冊一提皮包一任演說。先在池子内、挨次募收、小班中人、出頭募捐、又是北京花叢第一次特色。……と娼妓自身が一般觀客の集まっている場内を募金に回ったのである。

(35) 『富春樓』のあらすじは、以下のようである。妓女の陳三両はもと役人の娘であったが、両親が亡くなった後、伯母の家に引き取られた。しかし、この伯母は強欲な人で、三両を娼家に売り飛ばしてしまつた。そこに通つてきた陳魁なる客と兄妹の契りをおとした。そして、陳三両は陳魁に三百両の金を貸して、商売をして設けたら自分を落籍して欲しいと頼み、陳魁も喜んで旅立つ。

(36) 『順天時報』〇七年四月十二日〈白話〉「福寿堂清吟賑災會紀盛」(二)(一)に「富春樓演完後、便收場閉會。衆人還留無限的想慕。盼望著再遇唱演的好機會。玉花既有這能力、也很願登場演劇。白頭白平的妙芸。此後、或者還有機會、

也未可知。但這是未来的事、不能預定。隨後看罷」と期待も述べている。

(37) 『順天時報』〇七年四月三日「李文韻花四宝組織韻花別墅」、同紙同年五月八日「韻花別墅主人花四宝文韻閣開辦清吟南班助賑義務大會」。

(38) 『順天時報』「天津頭等名花尤金培到京」。

(39) 『順天時報』〇七年五月十四日「清吟助賑義務會改期初十一兩日舉辦並加演特別文明戲曲」。

(40) 『順天時報』〇七年五月二十四日「花四宝尤金培不演戲原因」に「此次清吟助賑會、因為北京諸大善士、一連數月、屢次開會籌款、捐項已成強弩之末：所以特別由花四宝、向天津尤金培、小培二人商請來京、試演幾齣文明新戲。無奈北京城、風氣還沒大開、女戲不便演唱。所以戲衣行頭、雖已預備齊全、仍然未能演唱。因此、戲座沒有完滿。觀會的人、雖已十分高興、却還有点兒遺恨。有人問道、東城長安街、不是演唱女戲嗎。答道、可不是嗎。福寿堂如果打了外國旗子、也就可唱女戲了。唉、可嘆」と前回、坤劇を見られただけに、義捐金を出した觀客に失望の念を懐かせたと同時に、日華戲園という日本居留地では、坤劇が許されていることに遺る瀬無さを感じているのである。

(41) 『順天時報』〇七年五月二十六日「清吟賑濟會唱角一覽表」。

(42) 『順天時報』○七年六月十三日「伶界義務會演劇調查記」。

(43) 『順天時報』○七年十二月五日「姜慧波文明進步」。

(44) 『順天時報』○七年五月十二日「清吟助賑義務會開會演說」に、「衆位大人老爺們、今天是李文韻同花四宝、以及各班姊妹們、開辦清吟助賑義務會、唱戲助賑的頭一天。所以要演說幾句。：提起這花界二字、我李文韻、就有点兒心酸、又可痛、又可恨、又可憐、眼看是沒有進步可望的了。其笑將來可望的事情很多咧。衆位大人老爺們、倒別笑話。且聽我李文韻一一講來、求各位指教指教。係我們這個行道、從前的人都把我們比著落花、：髻鬋花一落下去、就沒有翻身的日子似的。：大凡一個人、只要有思想、有志氣、甚麼事都可以做得出。孟子書上說(雖有惡人、齋戒沐浴、則可以事上帝)と滔々と淀みなく続く。

(45) 『北京誌』(娛樂遊戲・妓館)(清國駐屯軍司令部編纂博分館 明治四一年)。

(46) 『順天時報』○六年十一月十四日「頭等名花文韻閣到京」。

(47) 『順天時報』○七年五月二三日「福壽堂清吟助賑義務會紀盛」に「看官須知、到会來尽義務、不但辛苦把家中所有一切盤子錢、条子錢、牌局、酒局全耽誤了。並且還捐助許多錢。細細的算算他出入賬、可是捐害了。但有一層都享

了万金難買的名譽」二大字」と何を犠牲にしても、この際は名譽が大事と娼妓が認識したのである。

(48) 天津『大公報』一九〇六年三月二十日(北京)「優妓報効國民捐」に「北京名優楊小朵等及歌妓玉仙等、均各報効國民捐、至千金」。

(49) 天津『大公報』○八年二月十二日「不准演戲籌款、順天時報」同年同月十六日「駁演坤戲」。

(一橋大学大学院社会学研究科教授)